

■ 次に明確な方向感が出てくるまではガマン、ガマン！？

このところ発表された米経済指標を少し振り返ってみよう。

6月30日 6月のシカゴ購買部協会景気指数=39.9 : 市場予想の39.0より強い。

6月の消費者信頼感指数=49.3 : 市場予想の55.3より弱い。

7月01日 6月のADP全国雇用者数=-47.3万人 : 市場の予想の-39.5万人より弱い。

6月のISM製造業景況指数=44.8 : 事前予想の44.5より強い。

一見するとマチマチな結果のように思われるが、よく考えてみれば当然の結果とも言える。

米国経済が底打ちから緩やかな回復に向かっているとすれば、最初に改善されるのは「生産(製造)」に関わる指標であって、次に「消費(マインド)」、そして最後の最後に「雇用」と相成るのが当然の理屈だ。

周知のとおり、シカゴ購買部協会景気指数はシカゴ地区に対象が限定されているものの、デトロイトの自動車会社やピッツバーグの鉄鋼会社など、主要都市にある主要産業の動向が反映されていることから、ISM製造業景況指数に次いで市場の関心度は高い。

なお、少し前のことになるが6月18日に発表された6月のフィラデルフィア連銀景況指数は-2.2と事前予想の-17.4よりも強く、前月の-22.6よりも大幅に改善した。これもISM製造業景況指数との相関が強いことで知られ、総じて製造業の景況感や活動は改善しつつあることが見てとれる。

つまり、消費(マインド)や雇用(情勢)を示す指標が少々弱くても、それが必ずしもドル売り材料となるわけではない。一方、生産(製造)が改善傾向にあることはすでに織り込み済みであるため、少々指標が強くてもドル買い材料になるとは言い難い。よって、結局のところ外国為替相場はもみ合う…。

先週の本欄でも指摘したとおり、ドル/円は完全に三角保ち合いから抜け出すことができずにいる。下のチャートを見てもわかるとおり、すでに相当煮詰まっているのだが…。



それだけ、いまは方向感の出にくい展開が続いているということであり、残念なことだが、次に保ち合いを上放れる、あるいは下放れるといった一定の方向感が出てこない限り、具体的なポジションを構えることは「ヘタな鉄砲…」となる可能性を否定できない。方向感が見出せないという意味では、現在のユーロ/ドルも全く同じであり、ここはとにかくガマン、ガマン。ひとつ言えるとすれば、ドル/円は5月22日安値=93.85円を明確にした抜けない限り、いま暫くは1月21日安値から継続する円安・ドル高トレンドの渦中にあると考えていいのではないかと。個人的には、近い将来、三角保ち合いを上放れ、まずは6月5日高値=98.89円を試す展開になるものと考えているが、果たして…。

(7月1日 23:30)